課題となる行動＜昼食時＞へのアプローチ

昼食時の
感情爆発を
軽減させる支援

- Aさんが反応する利用者と場所を分ける
  ⇒少人数グループでも新たに反応する相手をつくる
  ⇒Aさんが食べたい人は、Aさんと食べたくない
- 最終的支援⇒支援者とマンツーマンで食事

19

感情爆発へのアプローチ

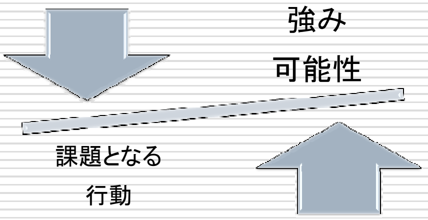
苛立つ時は
リスペリドン＜頓服＞の
服薬を促す支援

当初は服薬に対する拒絶、怒り
感情爆発⇒服薬⇒睡眠⇒気分の安定⇒快
服薬の効果を自分で感じ、促しに応じる
H25年より、自分から苛立ちを訴え服薬　3回／年

20

2つのアプローチ

- ➢ 課題となる行動を改善する支援
- ➢ 本人の「できる」「強み」を伸ばす支援



21

強みと可能性に着目したアプローチ

自信を積み上げる
承認欲求を満たす

- 本人の意欲 「やってみたい」ことをベースに
- 話す・歌う・書く・描く・縫う・磨く・歩く・・・・強みは何か
- 作業や活動にAさんを当てはめない
- Aさんの強みから作業や活動を創る視点

22

強み「根気」に着目したアプローチ

「Aさんの」
仕事を創る

- 木工製品「穴あきターナー」の手磨き・・絶品
- 染色製品「刺し子バッグ」の刺し子・・独創
- 工房での拭き掃除・・徹底的
- 支援者も2～3年かけて創る心構えで

⇒「すごいやん」⇒自信と認められた喜び⇒螺旋向上

23

強み「話す」に着目したアプローチ

コミュニケーション支援

毎日、支援者と
時間を設定して話をする

- 出勤前＜7:15＞の電話　「服薬と今日の気分」
- 昼食後の支援者とマンツーマンで話す＜10分＞
  - ➢ 不満や不安、気になっていることを支援者に伝える
  - ➢ 話すことでの安心感、解放感
  - ➢ 支援者は、不安や不満を和らげる方法を伝える

24

強み「書く」に着目したアプローチ

毎日、支援者と
交換ノートをして
思いを伝え、思いを受け取る

- 不安、不満、悲しみ、困ったことをノートに書く
- 仲間の良い面を見つけてノートに書く
- 支援者もAさんの書いた文に対しての思いを書く
- A4ノート。8年間で21冊。

25

家族支援

相談でき、
任せられる相手がある
安心感を

- 両親の外部への警戒心を時間をかけて解きほぐす
- 連絡ノート。その日「出来た」事を伝える。伝え続ける
- 転機⇒絵画展の受賞　父親がAさんを承認
- 居宅介護、短期入所等、利用できるサービスの体験

26

家族の変化による新しい暮らしの場

本人の意思を尊重した
暮らしの場の選択

- 母親の死去＜平成26年9月＞
- 父親の高齢
- Aさんの行動に対する理解と配慮ができるケアホーム
- Aさんが希望するホームでの体験利用を
- 事業所・支援者間で情報共有、連携ができるホーム

27

Aさんを尊重した支援

本人が決定できるように
選択肢を準備し
本人の意向を尊重する

- 支援者がAさんの意向を常に尊重する姿勢
- Aさんが決めたいことは、Aさんが責任を持つ
- 叶えられない意向を、納得できるまで話し合う

28

ホームページの紹介＜日々情報を更新しています＞

http://www.kuwanomi.org/

29

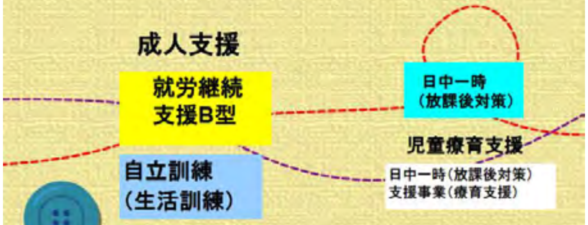
MEMO

30

軽度知的・自閉(発達)障害で行動に問題がある方の「癒とりの里」での支援の実践と課題

障害福祉サービス事業所「癒とりの里」
サービス管理責任者　原　敏樹

「癒とりの里」の事業内容



「癒とりの里」について

- 利用者一人ひとりの「暮らす・働く・楽しむ」に向けた支援を基本理念に利用者本位の支援とノーマライゼーションの実現のため、ﾆｰｽﾞにそった生活支援を伴う就労支援を心がけ、障害福祉サービス事業所『癒とりの里』が誕生しました。
- すべての障害の方々、社会的ひきこもりの発達障害や自閉傾向の方達が自立に向けての多様な関係機関との連携を密にして当たり前の生活を目指した支援を行うことが発足の理由です。

Oさんの事例を通して、問題行動の改善の方法や課題を話していきたいと思っています

行動マネージﾒﾝﾄ ABA(応用行動分析)とは

A(先行事象)「どんなときに」B(行動)「どんな(適切・問題)行動がおきC(結果)「その結果どうなったか」の3つで(適切・問題)行動を分析することです。なぜそのような行動を起こすのかと整理し理解する事が問題行動繰り返す人達への適切な働きかけに繋がり、又適切な行動の形成になり、問題行動が軽減していきます。

例題として Oさんの問題行動を整理をしました

A一拒否される・いやな言葉をいわれた時
(例)「そこどいて・じゃま・めざわり・どっかいって。あっちいって」といわれる。

B一いらいら・暴言・破壊行動があり、ﾌﾗｯｼｭﾊﾞｯｸが始まる。「いらない人間・死んだほうがまし」ネガティブな発言がでてくる。
はさみで手首を切ろうとする

C一やさしくしてほしい。かまってもらいたい・相手をしてほしい。愛情がほしい

適切な行動の整理した結果

A―物理的構造化による小集団で活動できる環境の導入をおこなった。又、視覚的支援及び丁寧な言葉で具体的に説明した。

B―見通しがついた事による安心感から、落ち着いて活動が出来ている

C―楽になる。人を信じられるようになった。将来の希望の光が見える。

Oさんの生育暦と支援の流れ

（療育手帳B2・広汎性発達障害）

- 特性からくる理解度の低さから、相手の気持ちや周りの空気が読めずに、周りから理解されず、いじめ、いやなことを何度もされてきた。
- 普通小・中・高と我慢をして、卒業後も専門学校に入学、周りの期待に添うために行っていた。

  卒後は進路が無く、家庭で引きこもり状況になり、暴言、破壊、自傷行為が増えてきた。
- ここで初めてクリニックに行き。療育手帳取得（B2）広汎性発達障害の診断を受ける。ある場所で活動をしていたが、トラブルから癒とりの里に急遽来所になる。

Oさんの支援

・視覚支援等活用して安定した時期もあったが、の入れ替わり、対人関係・家庭環境のトラブルから安定と不安定の繰り返しが約3年ほど続く

・ﾌﾗｯｼｭﾊﾞｯｸが激しくなり精神科入院を検討するところまできていた。

・逆転の発想から、本人は就労したい、自分に向けた仕事をしりたいというﾆｰｽﾞを尊重し、本人にﾌﾛｰﾁｬｰﾄにて働くまでの流れを伝え、ﾊﾛｰﾜｰｸ登録・職業ｾﾝﾀｰにての職業評価を受けることができたことが大きな機転になり、ここから大きく支援の方向性を転換、行動マネージﾞﾒﾝﾄが活用できるようになってきた

Oさんの約束事

- ①一日の活動は、隣の部屋で行います。
- ※癒とりに着いたら、隣の1階の部屋でふりかえりを書き、活動準備を行います。
- ※外出はできませんが、急用の場合はスタッフ(原・春本)に必ず相談をしてください。
- ②物や道具・扉の開け閉めなどは、優しく扱いましょう。
- ※活動の中で、物などを扱う時は、優しく取り扱いましょう。
- ③相談やお話をする時は、相手の名前を呼びましょう。
- ※「ねぇねぇ」 ⇒「〇〇さん」 など、相手の名前を呼んで、会話を行いましょう。
- ④悪い思い出をフラッシュバックする時は、良い思い出を考えるようにしましょう。
- ※どうしても、体のコントロールが難しい場合は、スタッフ(原・春本)に相談しましょう。上記、「3つ」の約束事を守り、作業に対しての意識をもち、楽しく活動を行えるように、がんばって行きましょう！！

本人が書いた詩を伝えたいと思います

・あなたにとってともだちってなんですか

・あなたにとってしんゆうてなんですか

・よくこういう質問をされたとき大切な人とかかけがえのないひととかいうけれど、いけないことをしたら注意してあげること

・やめようといえるゆうきを持つことこれが本当のともだちではないだろう

Oさんの今現在の様子と課題

- ｽﾀｯﾌがなぜ問題行動が起きるのか整理されたことにより改善策が取れた。（賞賛・ほめられたい）
- 癒とりの里で物理的構造化による支援体制ができ、落ち着いた作業環境ができる
- ﾌﾗｯｼｭﾊﾞｯｸ減りが減り、自主的発言（表出）ができてた。
- 再決断療法でPTSD（ﾌﾗｯｼｭﾊﾞｯｸ）を克服する気持ちでてきて第1回目が開始される。

（課題点）

・不安が強い人なので、再決断療法により本来の自分に戻れるか、まだ不安要素もある。

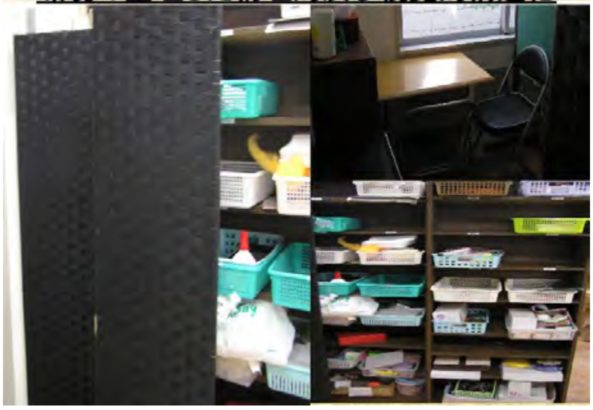
・かまってもらいたい人への依存は大きくは変わっていない

行動を良い方向へ導くために スタッフ皆で工夫した支援方法

- 環境の整理
- 物理的構造化
- ご褒美の工夫
- ペクスによるコミュニケーションツール
- 携帯用構造化
- 視覚支援
- 手順書・ソーシャルストーリー等など

環境の物理的構造化

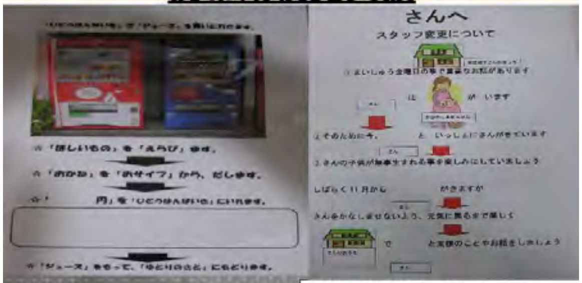
環境の整理した物理的及び視覚的構造化



ご褒美の支援

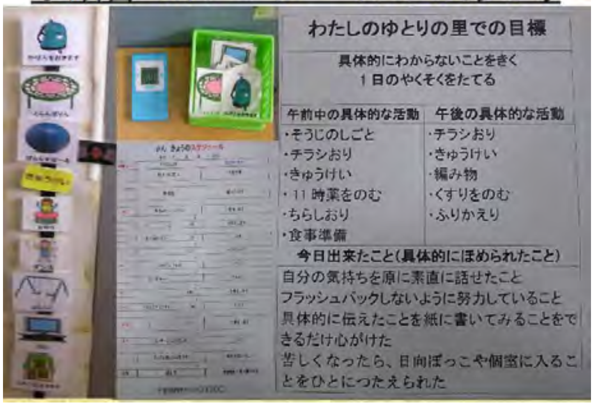
ペクスによるコミュニケーションツール

携帯用視覚支援

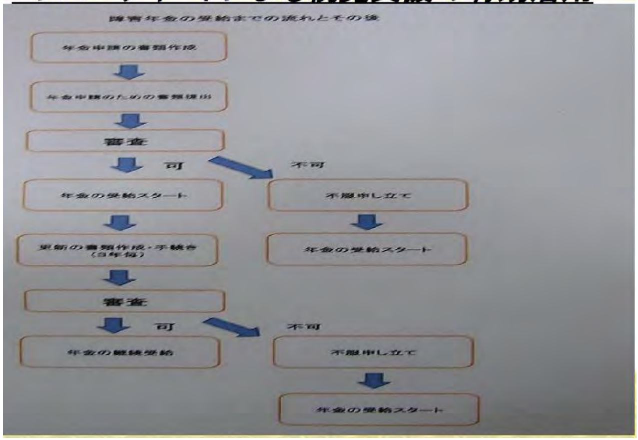


＜携帯ホワイトボード＞￥500-
発達障害の方や、耳の不自由な方との視覚的コミュニケーションツールとして、書いたり消したりできる簡単メモ帳です。

手順書・スケジュール・一日のめあて等



フローチャートによる視覚支援の有効活用



成功事例としてのYさんの支援

- お金はお母さんが管理していたが、ゲームを買いたいために破壊行動を繰り返ので、母は臨時収入を渡すことでなだめていた。そこでお金の管理をする事を関係者期間で整理をする為に話し合いがなされました。
- その結果、本人が破壊行動をしてお金をもらうことに着目するのではなく、仕事をして、お給料をもらう目標を立て支援を行いました。
- *癒とりの里にくることの意義とお金をためる意識が定着してきた事により、仕事と報酬の関連性と約束事の理解が進み、次のような良い行動が連鎖していくことになりました。*
- ①母親に対して大きな声を出さなくなったり、破壊行動・暴力をして自分の要求を通さなくなりました。
- ②癒とりの里で仕事をしてお給料をもらい、好きなものが買える事の理解が定着してきました。
- ③地道にさりげなくやらせるのではなく自主的な発言を約束事をお互いに話し合いながら進めていくことにより代替表現が減少、適切な言語が増えました。

Yさんの今現在の様子と課題

- 癒とりの里では安心して自主的な発言が自然と出ている(脱物理的構造化ができた)
- 安心した場所ではいろいろな人との会話が可能になった。仕事のバリエーションも増えている
- 大きな手術も耐えることができている
- お母さんがいなくても他人や一人ですごすことがほぼ毎日できている
- 行動ﾏﾈｰｼﾞﾒﾝﾄの導入がとても効果的であり、今現在も継続していることが、他の発達障害の方々へ支援つながるｽﾀｯﾌの自信につながり、関係者チームの体制が整っていたことは癒とりの里で問題を抱える他の人への支援の基礎になっています。

支援おこなって再確認できた事①

- 人は変われることができるということ
- 再支援は可能である事。
- 可能性を引き出すために心理状況・特徴特性・生い立ちを詳しく知ることが必要である事。
- どこまで工夫をしたら本来の自分に戻れるのか見極まる事と取り戻して再支援できる関係チームの役割体制が不可欠であり、できる環境であること
- できない環境であればその学校や事業所の仕組みを変えるか専門家や相談支援専門員等のアドバイザー的な支援が必要であるため上司に対して訴えを出す必要があると考えます

支援おこなって再確認できた事②

経験から支援・教育・家族に伝えたい事

- **社会的引きこもりの問題行動を引き起こす方、特に後でわかる発達障害や精神障害の方々は学齢期の頃のエピソードを聞くと支援されてきていない多さに今後の課題があると思います。**
- **すべての障害のある人達はﾆｰｽﾞを持ち、その希望にこたえるために支援が必要であるという事を実感しています。**

まとめ

・障害のある人たちは特性ゆえ理解されないまま様々な要因が2次・3次と重なって、問題行動により、生活する事自体が困難になり、本人も苦しみ、家族や先生・支援者も同じく苦しんでいると思います。

- 経験してみて、応用行動分析による行動マネージメントはそのことの解決の入口であると思います。諦めずに使い続けること、継続することが大事だと痛感しています。
- 将来、すべての人たちに環境が変わっても支援内容が継続できる事が保障される制度ができることを心から願います。

ご清聴ありがとうございました

これから一緒に学んでいきましょう

自己選択・自己決定の大切さ

～他害行為のあったAさんが穏やかに
過ごせているわけ～

八幡西障害者地域活動センター
支援員　喜多　剛一

○Aさんの基礎情報について

28歳　男性　　　両親と同居
療育手帳　B2
障害程度区分　4

〈学歴〉
・K中学校卒
・Y支援学校卒

行動面

- ADL・・・ほぼ自立（夜のみ、オムツ使用）
- 対人面・・・子供、老人、ダウン症の人が苦手
  高い声、命令口調が苦手
- 好きなこと・・・ドライブ、車（ミニカー）、プリキュア、
  ポケモン
- 配慮点・・・自傷・他傷行為がある、大声での独語あり

○八幡西障害者地域活動センターの事業紹介

定員　90名
現員　125名

・自立訓練事業（生活）
・就労継続支援事業B型
・生活介護事業

○ほっとハウスにしかつ
放課後等デイサービス

センター利用に至った経緯

・A事業所1年7ヶ月在籍　（職員への他害行為）
・B事業所6年5ヶ月在籍　（地域の方への他害行為）
↓
辞めざるを得ない状況になる
つばさへの相談を経て、当事業所を利用開始

センター利用にあたっての母親の思い

受け入れにあたって…

- 「つばさ」からAさんの情報を得る
- 母親との利用前面談実施

↓

- （もっと具体的な本人の様子が知りたい）

↓

- B事業所に行き、当時のAさんの様子や支援体制の確認に行く

○B事業所での様子

・対応することは本人と関係性
がとれているスタッフが中心
・毎日のスケジュールを
カードなどを用いてAさんに提示
・作業の時間とパソコンの時間を
決めていた。

利用開始時

利用開始時の個別支援計画（ISP）

- 1　落ち着いて過ごす（環境設定）
- 2　自己選択（コミュニケーション支援）
- 利用日　　月・水・金とする

環境設定①

個別スペース

・他の利用者から離れた場所に設置

＜理由＞

・大声を出す利用者などが同じ部屋にいるため、他の利用者から離し、落ち着いて過ごせるように

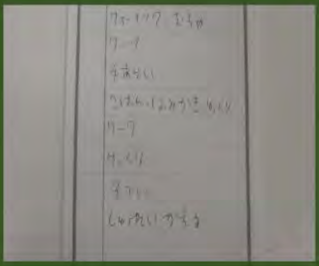
・もし、Aさんが不安定になっても、すぐには他の利用者に手が出ない

環境設定②

スケジュール提示

職員が1日分の予定を紙に書いて説明。紙は机上に置いていき、1つ内容が終わると、ペンで消していった

スケジュールの内容については、センターの活動に慣れる事と安全面の配慮から、ウォーキングと個別活動を中心に行った。



環境設定③

個別活動について

最初は、Aさんの作業能力が分からず、職員が3種類程度用意した

・作業能力は高くアッと言う間に終わらせ、自席で寝る事もあった。

コミュニケーション支援

口頭でのやり取りの場合、意図がすれ違い確認しづらい

↓

視覚からの情報として伝える

2～3か月後・・・

頭からなかなか離れなかった言葉・・・

他害行為は全く見られない

↓（しかし）

利用開始当初から母親に言われていたことが

「最初は、この子も緊張しているけど、

2～3カ月すると慣れてきて、手を出すんです。

今までがそうでした」

環境設定での変化

自分の活動スペース以外でも過ごす場面が見られるようになった

トイレに単独で行くようになった

エントリーシートの活用

エントリーシートとは・・・

①毎月のスケジュールを、事前に作成する。

②各利用者は担当職員と一緒に参加する活動にエントリーを行う。

・意思表示が難しい方は、個別支援計画に沿って職員がエントリーを行う。

コミュニケーション支援での変化①

少しずつ「ウォーキング」「個別活動」以外の活動を選択肢に入れる。

ものづくり（木工・アート・農園）

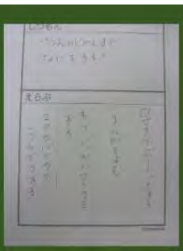
いきいきリフレッシュ活動（エアロダンス・エンジョイダンス・料理・ドライブ・フットバス…）

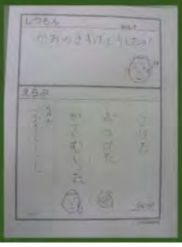
コミュニケーション支援での変化②

担当職員と一緒に翌月分の自分のスケジュールを作成する

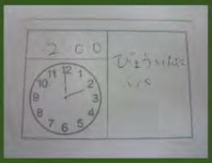
コミュニケーション支援での変化③

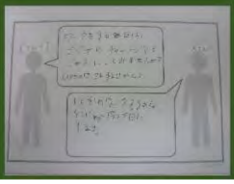
コミュニケーションメモを使用して
Aさんの意思確認を行う

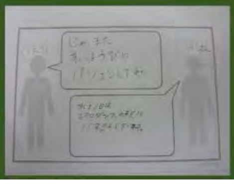




コミュメモの使用例







最近の様子

旅行

・生活介護1泊旅行　（山口・萩方面）
・キャンプ1泊旅行　（くじゅう方面）
・日帰り旅行　　　（正助ふるさと村）
・不参加

↓

日帰り旅行を選択

ポスターを使用して、説明を行う

参加にあたり

スケジュール提示は普段のものを活用

車両の座席の選択

隙間時間の過ごし方の選択

旅行時の様子

通院について

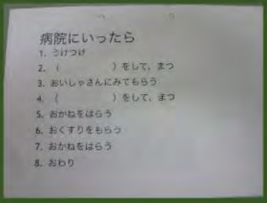
職員が口頭で通院を促す
本人から「イヤ！怖い！！」と拒否

ソーシャルストーリーを作成して「病院の大切さ」「足の危険性」を伝えた

↓

本人から「病院に行こうかな」

ソーシャルストーリー



通院時の様子

・診察まで30分ほど待つ時間があったが、iPadをしながら、落ち着いて待つことが出来た

・診察時は不安そうな表情があったが、受診することが出来た

今回の実践報告の話を受けて

改めて
Aさんのことについて話し合いを行った

何故、センターでは、他害行為が無いのか？

今までの事業所との違いは何だろう？

話し合った結果～見立てとして～

毎日、毎月の活動内容の情報提示は、以前から出来ていた

↓ 違いは

センターでは、いくつかの選択肢の中から、自分の好きな活動を選ぶことが出来る環境が出来た

↓ 更に

その活動を選ぶための情報提示（その活動を選ぶと何をするのか）を行う事が出来ていた

自己選択・自己決定について

・自己選択・・・選択肢を用意出来る環境・支援
（選択肢を増やす環境・支援）
自己選択するための事前の情報提示

・自己決定・・・自己決定したものを相手に伝える方法の確立
↓本人の努力ではなく・・・
自己決定したものを周りが受け取る方法の確立

今後の取り組み

現在の情報提示の方法が適切であるかの把握は続けていく必要がある

↓ その上で・・・

センターでの情報提示の方法をセンター以外の場面（家庭やヘルパーなど）でも、共有する

↓ 更に

現在、必要と思われるが活用できていないサービス（ショートステイ・グループホーム）にも、つなげる

今後の課題

センターで落ち着いていても・・・
・家族と外出時に子どもに向かうことがある
・（母親が他害を心配して）通院出来ない　など

自己選択・自己決定が「特定の人」にだけ
伝わるものだと、意味がない・・・

・

そのために・・・

Aさんをとりまく人たちと連携をはかる

選択できる楽しさや喜び知り
Aさんの生活場面全般の充実につなげていく。

自己選択・自己決定ともう1つ・・・

ご静聴ありがとうございました

資料２－３

平成 26 年度 成人期の自閉症者への支援の実際－福祉サービス事業所の実践に学ぶ－に関するアンケート

該当する項目に○をつけてください。

◆所属について、おたずねします。

①小学校知的障害特別支援学級　②中学校知的障害特別支援学級
③知的障害特別支援学校（小学部・中学部・高等部）　④福祉サービス事業所

１．今日の研修会はいかがでしたか。

①理解できた　②少し理解できた　③どちらでもない
④あまり理解できなかった　⑤全く理解できなかった

２．実践報告の中で、参考になった取り組みはありましたか。

①かなりあった　②少しあった　③どちらでもない
④あまりなかった　⑤全くなかった

３．質問２の内容について、具体的に教えてください。

（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

４．今回の成人期の実践を、学校や事業所に取り入れようと思いますか。

①かなり思う　②少し思う　③どちらでもない
④あまり思わない　⑤全く思わない

５．質問４で、①・②と答えた方にお聞きします。具体的な内容を教えてください。

（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

６．質問４で、④・⑤と答えた方にお聞きします。理由を教えてください。

（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

７．全体的な感想や今後希望する研修や講師がありましたらお書きください。

（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

★☆ご協力ありがとうございました★☆

資料２－４

平成 26 年度 成人期の自閉症者の支援の実際－福祉サービス事業所の実践に学ぶ－に関する事後アンケート

該当する項目に○をつけてください。

◆所属について、おたずねします。

①特別支援学校（小学部･中学部･高等部･その他）　　②福祉サービス事業所
③その他（　　　　　　　　　　　　　　　　　）

１．前回の研修会を参考にして、学校や事業所の中で取り組んだ内容がありますか 。

①ある　　②少しある　　③どちらでもない
④あまりない　　⑤全くない

２．質問１で、①・②と答えた方にお聞きします。具体的なの内容を教えてください。

（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

３．質問１で、④・⑤と答えた方にお聞きします。取り入れることが難しかった内容や理由を教えてください。

（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

４．今後希望する研修や講師がありましたらお書きください。

（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

★☆ご協力ありがとうございました★☆

資料３－１

平成 26 年度　北九州市発達障害者支援モデル事業報告書

高校生・大学生を対象としたワークショップ

Ⅰ．事業要旨

このプログラムは、北九州市発達障害者支援センターに継続相談をしている青年期の相談者の中で、学校での対人関係に悩み、将来への不安が強く自信を失っている方を対象に、同じ悩みを持つ同年代の当事者同士が集まる少人数での活動を行うことによって、自己や他者の視点を理解したり、ソーシャルスキルやコミュニケーションスキルの向上の一助とすることを目的としている。

夏季休暇中を利用して、参加者を高校生グループと大学生・専門学生グループに分け、4 回シリーズでプログラムを実施した。参加者は、高校生グループは 8 名、大学生・専門学生グループは 6 名の計 14 名であった。また、プログラム終了後に参加者から「もっと集まりたい」と要望があり、平成 27 年 3 月 27 日（金）に 2 グループ合同で 5 回目のワークショップを実施した。

効果検証に関しては、プログラム開始前と終了後に、ソーシャルスキルチェックリストと自尊感情尺度の自己評価を行い、参加者の変化の測定を行った。また、毎回の活動ごとの参加者の様子を記録し、活動中の変化を見た。また、プログラム終了後に、参加者全員および 13 名の保護者に対し、インタビュー調査とアンケート調査を実施し、家庭や学校での参加者の変化を聞き取った。

ソーシャルスキルチェックリストおよび自尊感情尺度については、参加者の多くが、初期チェックよりも最終チェックの方が評価点が上がっていた。活動中の様子からは、参加者同士の関わりを楽しむ様子が多く見られた。一方で、全体的に社会的な振る舞いに課題のある参加者も多く、自己モニタリングしていくことが難しい様子が見られた。そのため、今後も自分の言動を振り返ることができるようなプログラムの内容の検討および個人目標の確認と活動の振り返りを丁寧に行うことが必要である。プログラム実施後のインタビュー調査からは、ワークショップに「また参加したい」と答えた参加者が多く、活動への満足度は高かった。ワークショップが参加者にとって「同年代の仲間と過ごす楽しい場所」になっていることが分かった。大学生・専門学生グループは、身近な問題として講話の満足度も高かった。その一方で、「話し合い活動が負担」という意見もあがったため、今後も参加者の状態に応じ、活動の組み立て方の検討が必要である。保護者アンケートの結果については、ワークショップへの参加が本人にとって何らかの有効性があったと感じている保護者は 62%であった。保護者は、自立への不安が高く、進路や就職の情報を得る社会資源の場としてワークショップの活動の継続を希望する意見が多かった。今後も関係機関と連携しながら、進路の講話

や就労している社会人当事者との座談会などを企画し、参加者が将来へのイメージを繋げるような支援が重要である。参加者が楽しんで継続的に参加できるよう配慮しながら、各世代に応じた活動内容を考慮して活動を実施していきたい。

Ⅱ．事業目的

青年期の発達障害者は、その障害特性から、所属集団での人間関係に困難を抱えていたり、周囲との違いを否定的に捉え、自尊感情が低下し劣等感が高まることも少なくない。北九州発達障害者支援センターの青年期の相談者の中にも、学校での対人対応に悩み、将来への不安が強く自信を失っている方がいる。そこで、同じ悩みを持つ同年代の当事者同士が集まり、少人数での活動を通して、自己や他者の視点を理解したり、ソーシャルスキルやコミュニケーションスキルの向上の一助とすることを目的とする。

Ⅲ．事業の実施内容

ワークショップは夏季休暇中に 4 回シリーズで、高校生グループと大学生・専門学生グループに分け、午後 2 時から 3 時半までの時間帯で活動を実施した。参加者は、高校生グループは 8 名、大学生・専門学生グループは 6 名の計 14 名であった。活動の進行については、北九州市発達障害者支援センターの職員が行ったが、3 回目の「働くことについて」の講話は、北九州若者サポートステーションの職員に講師を依頼した。

4 回シリーズの活動終了後に、参加者から「もっと集まりたい」などの要望があり、平成 27 年 3 月 27 日（金）に 2 グループ合同で 5 回目の活動を実施した。

活動内容の詳細と参加人数を、表 1 に示す。

表 1　活動内容と参加人数について

日程	活動の内容	参加人数
7 月 22 日（火）	ロールプレイ、ゲーム、茶話会	高校生 6 人　大学生・専門学生 3 人
7 月 31 日（木）	ロールプレイ、ゲーム、茶話会	高校生 5 人　大学生・専門学生 4 人
8 月 6 日（水）	講話「働くことについて」	高校生 6 人　大学生・専門学生 5 人
8 月 20 日（水）	話し合い、調理活動	高校生 5 人　大学生・専門学生 3 人
3 月 27 日（金）	ゲーム、交流会	高校生 4 人　大学生・専門学生 2 人

効果検証に関しては、プログラム実施前と終了後にソーシャルスキルチェックリスト（資料 3-2）と自尊感情尺度シート（資料 3-3）を参加者につけてもらい、参加者の変化を測定した。毎回の活動ごとに参加者の様子を記録し、状態の変化を見た。プログラム終了後には、参加者にインタビュー調査（資料 3-4）（資料 3-5）を行った。保護者にはアンケート調査（資料 3-6）を実施し、家庭での参加者の様子の変化を聞き取った。

その他の取り組みとして、平成 27 年 1 月 22 日（木）と 27 日（火）に、北九

州若者サポートステーションで実施しているソーシャルスキルトレーニング活動と交流会の様子を見学し、平成 27 年 2 月 13 日（金）に情報交換会を実施した。若者サポートステーションの職員からは、ロールプレイのテーマ設定や活動スケジュールなどについての助言をもらった。

Ⅳ．分析

1．調査結果

①　ソーシャルスキルチェックリスト

青年期ワークショップ参加者に対して、プログラム開始前と終了後にソーシャルスキルチェックリストの自己評価を実施した。

自己評価の結果を、表 2、表 3 に示す。

表 2　ソーシャルスキルチェックリスト：自己評価得点（高校生）

		A さん	B さん	C さん	D さん	E さん	F さん	G さん	H さん
Ⅰ集団行動	対人マナー	15 点	10 点	9 点	6 点	10 点	8 点	10 点	9 点
		15 点	10 点	9 点	9 点⇧	12 点⇧	11 点⇧	10 点	**8 点**⇩
	状況理解・心の理論	13 点	10 点	2 点	5 点	10 点	8 点	9 点	9 点
		13 点	10 点	3 点⇧	7 点⇧	11 点⇧	10 点⇧	**8 点**⇩	9 点
	セルフコントロール	9 点	8 点	6 点	5 点	7 点	5 点	8 点	5 点
		9 点	8 点	7 点⇧	8 点⇧	9 点⇧	7 点⇧	**7 点**⇩	7 点⇧
	課題遂行	13 点	10 点	9 点	5 点	7 点	4 点	9 点	5 点
		13 点	10 点	**7 点**⇩	7 点⇧	8 点⇧	9 点⇧	9 点	6 点⇧
Ⅱ仲間関係スキル	仲間関係の開始	8 点	4 点	7 点	4 点	5 点	1 点	6 点	4 点
		7 点⇩	4 点	8 点⇧	5 点⇧	6 点⇧	2 点⇧	8 点⇧	**1 点**⇩
	仲間関係の維持	18 点	10 点	16 点	7 点	15 点	11 点	12 点	11 点
		18 点	10 点	18 点⇧	9 点⇧	**13 点**⇩	**10 点**⇩	14 点⇧	11 点
	仲間への援助	9 点	6 点	6 点	4 点	5 点	6 点	6 点	5 点
		9 点	6 点	6 点	6 点⇧	6 点⇧	**5 点**⇩	8 点⇧	5 点
Ⅲコミュニケーションスキル	聞く・話す	6 点	4 点	3 点	1 点	3 点	3 点	3 点	2 点
		6 点	4 点	3 点	2 点⇧	4 点⇧	4 点⇧	6 点⇧	2 点
	非言語的スキル	9 点	6 点	6 点	3 点	3 点	6 点	6 点	1 点
		9 点	6 点	6 点	4 点⇧	4 点⇧	7 点⇧	9 点⇧	1 点
	アサーション	20 点	15 点	21 点	10 点	15 点	17 点	15 点	6 点
		20 点	16 点⇧	23 点⇧	18 点⇧	18 点⇧	**14 点**⇩	21 点⇧	**3 点**⇩
	話し合い	8 点	6 点	5 点	3 点	5 点	4 点	6 点	3 点
		8 点	6 点	5 点	4 点⇧	6 点⇧	4 点	9 点⇧	3 点

合計	128 点	89 点	90 点	53 点	85 点	73 点	90 点	60 点
	127 点 ⇩	90 点 ⇧	95 点 ⇧	79 点 ⇧	97 点 ⇧	83 点 ⇧	109 点 ⇧	**56 点** ⇩

表 3　ソーシャルスキルチェックリスト：自己評価得点（大学生・専門学生）

		I さん	J さん	K さん	L さん	M さん	N さん
Ⅰ集団行動	対人マナー	11 点	11 点	10 点	10 点	10 点	10 点
		7 点 ⇩	12 点 ⇧	**9 点** ⇩	10 点	11 点 ⇧	12 点 ⇧
	状況理解・心の理論	3 点	4 点	10 点	8 点	8 点	10 点
		7 点 ⇧	7 点 ⇧	10 点	7 点 ⇧	**5 点** ⇩	**9 点** ⇩
	セルフコントロール	9 点	7 点	6 点	7 点	9 点	7 点
		11 点 ⇧	8 点 ⇧	8 点 ⇧	7 点	10 点 ⇧	8 点 ⇧
	課題遂行	7 点	8 点	8 点	8 点	12 点	8 点
		6 点 ⇩	9 点 ⇧	9 点 ⇧	**7 点** ⇩	10 点 ⇩	10 点 ⇧
Ⅱ仲間関係スキル	仲間関係の開始	8 点	5 点	6 点	4 点	8 点	4 点
		8 点	7 点 ⇧	6 点	5 点 ⇧	8 点	4 点
	仲間関係の維持	15 点	18 点	13 点	13 点	13 点	5 点
		15 点	18 点	13 点	14 点 ⇧	13 点	**4 点** ⇩
	仲間への援助	9 点	9 点	9 点	6 点	4 点	4 点
		9 点	9 点	9 点	7 点 ⇧	5 点 ⇧	4 点
Ⅲコミュニケーションスキル	聞く・話す	3 点	4 点	3 点	4 点	5 点	4 点
		2 点 ⇩	5 点 ⇧	4 点 ⇧	4 点	6 点 ⇧	**3 点** ⇩
	非言語的スキル	6 点	5 点	3 点	5 点	5 点	5 点
		6 点	6 点 ⇧	3 点	**4 点** ⇩	**4 点** ⇩	7 点 ⇧
	アサーション	19 点	12 点	13 点	12 点	21 点	17 点
		22 点 ⇧	17 点 ⇧	14 点 ⇧	15 点 ⇧	21 点	19 点 ⇧
	話し合い	7 点	4 点	3 点	5 点	7 点	6 点
		8 点 ⇧	6 点 ⇧	4 点 ⇧	6 点 ⇧	**6 点** ⇩	7 点 ⇧
合計		97 点	87 点	84 点	82 点	102 点	80 点
		101 点 ⇧	104 点 ⇧	89 点 ⇧	86 点 ⇧	**99 点** ⇩	87 点 ⇧

ソーシャルスキルチェックリストは、各項目「0~20%達成」で 0 点、「21~50%達成」で 1 点、「51~80%達成」で 2 点、「81~100%達成」で 3 点とし、自己評価を行った。各項目、プログラム実施前の得点を上段、終了後の得点を下段に示し、下段の中で評価点が上がった項目を四角、評価点が下がった項目を太字で示す。

ソーシャルスキルチェックリストの自己評価は、領域や項目によって点数

が異なったが、参加者の多くが、初期チェックよりもプログラム終了後の最終チェックの方が合計評価点が上がっている。3 名評価点が下がったが、参加者からは「できていたと思っていたことが実は苦手だった」というコメントもあり、自己理解に繋がったことが考えられる。評価が上がった項目は個人によって異なるが、特にⅠ集団行動の【セルフコントロール】に効果が見られる。全 4 回の活動全てに参加した 4 名に関しては、Ⅲコミュニケーションスキルの【アサーション】が良くなっている。

② 自尊感情尺度シート

青年期ワークショップ参加者に対して、プログラム開始前と終了後に自尊感情尺度シートの自己評価を実施した。

自己評価の結果について、図 1、図 2 に示す。

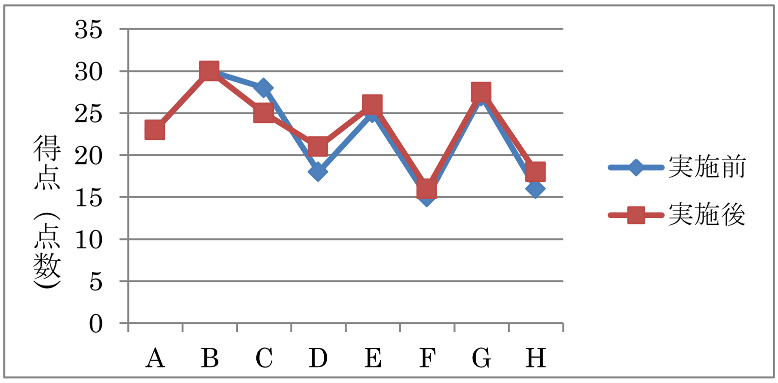


図 1　自尊感情尺度：自己評価得点（高校生）

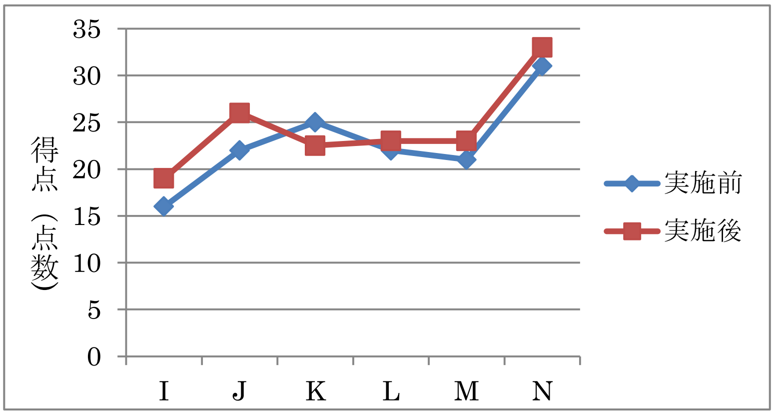


図 2　自尊感情尺度：自己評価得点（大学生・専門学生）

自尊感情尺度シートは、各項目を 4 段階評定で点数化し、「強くそう思わない」で 1 点、「そう思わない」で 2 点、「そう思う」で 3 点、「強くそう思う」で 4 点とした。図 1、2 の縦軸は、参加者の自己評価得点を示す。

自尊感情尺度シートにおいても、個人によって自己評価の差が大きかった。参加者 14 名中 10 名の方が、最終チェックの評価点が上がっている。評価点

に変動のなかったうちの１名に関しては､点数自体に変化はないがチェック項目は変化しており、「自分のことを前向きに考えている」の項目が上がっている。

③　ワークショップ活動参加時の様子の変化

表４は、ワークショップ参加者の活動記録から、個人の特記事項をまとめたものである。

表４　ワークショップ参加者の活動記録（高校生）

A	・ロールプレイは、良い例を実演するメンバーの演技を見て、肯定的な意見を発表する。 ・活動中は、自分からメンバーに話しかけることはない。 ・講話は、講師に注目しよく聞いている。自分から講師へ質問を聞きに行く。 ・調理は､「家でよく調理をする」と話し、作業は手早く行う。
B	・ロールプレイは、自分の意見を発表したり、他のメンバーの発表に同調する。 ・茶話会は、お菓子を沢山取り、リーダースタッフに注目せず食べ続ける。 ・講話は、手遊びをしたり、持参した宿題プリントを解く等、話を聞いていない。 ・調理は､「面倒くさい」と言う。
C	・ロールプレイは、積極的に自分の意見を発表する。 ・ゲーム活動は、メンバーと話をして盛り上がるが、リーダースタッフが全体説明を始めても話をやめずに説明を聞いていないことが多い。 ・茶話会は、隣のメンバーの肩を急に叩いて注意喚起をする。メンバーが驚くと、すぐに謝る。
D	・ロールプレイは、メンバーの意見に頷く。スタッフが促すと､「良い例」を実演する。 ・茶話会は、メンバーから話しかけられると話に入るが、自分からメンバーに話しかけることはない。途中で携帯ゲームを始める。 ・講話は、下を向いていることが多く、資料や講師に注目をしていない。 ・調理は、進んで作業を行い、衛生面を気にして小まめに手洗いに行く。
E	・話し合いの時は、難しい内容の話を一方的に話し始める。 ・ロールプレイは､良い例を実演するメンバーの演技を見て、肯定的な意見を発表をする。 ・茶話会は、メンバーと趣味の話しで盛り上がるが、内容が詳しすぎるため、メンバーはついてこれないことがある。 ・講話は、時々メモを取りながら聞いているが、途中から寝る。
F	・ロールプレイは、話し合いの内容の理解ができておらず、自分の意見を発表することはできない。 ・ゲーム活動は、トランプ（七並べ）やジェンガのルール理解ができていない。
G	・ロールプレイは、メンバーの話を聞いているが、自分から進んで発言することはない。リーダースタッフから意見を聞かれると、自分の意見を発表する。 ・ゲーム活動は、笑顔がなく、黙々と参加している。 ・茶話会は、自分からメンバーに「ジュースを取って下さい」と要求する。

H	・講話は、手元の資料は見ずに、スライドに注目している。講師の話は、集中して聞いている。 ・活動中は、メンバーと話すことはない。 ・休憩の時は、席に着いたままである。スタッフが飲み物をすすめるが、断る。

表５　ワークショップ参加者の活動記録（大学生・専門学生）

I	・ロールプレイは、積極的に自分の意見を発表したり、「この場合はどうしたらよいですか？」とスタッフに質問する。 ・ノートを持参し、話し合いで出た意見を記入する。 ・茶話会は、メンバーと趣味の話をしたり、学校生活についてのアドバイスをする。 ・講話は、講師に注目しよくメモを取っている。
J	・ロールプレイは、リーダースタッフから意見を聞かれると、発表する。実演をするのは「ちょっと無理」と言う。 ・ゲーム活動は、チームの席替えをジェスチャーで提案する。 ・茶話会は、お菓子の袋を開けたり、紙コップをメンバーに配る。 ・調理は、エプロンを忘れる。メンバーの動きを見ながら、自分から片づけをする。
K	・ロールプレイは、話し合いが続くと、集中が切れ、途中で寝る。 ・茶話会は、メンバーから通っている学校のことを聞かれ、「言いたくない」と返答する。 ・講話は、資料を見ながら聞くが、30 分経過した頃から下を向いて寝る。
L	・講話は、資料にメモをとりながら聞いている。 ・話し合いでは、積極的に発言する。 ・調理は、他のメンバーが苦手な作業を、代わりに行うことを提案する。 ・メンバーとは、学校の話しや進路等の話をする。
M	・活動前は、メンバーと学校のこと等の話をする。メンバーの発言に「新しい価値観が分かりました」と発言する。 ・ロールプレイは、テーマの状況設定を細かく確認する。 ・ゲーム活動は、「今日するゲームは、じゃんけんで勝った人が決めよう」と提案する。 ・講話は、40 分遅刻してくる。質疑応答では、講師に質問するが、講師の説明に対して「具体例が知りたいし、それが主旨なんですが」と納得していない。
N	・講話前は、席に着くなり右隣のメンバーに話しかける。メンバーに無視されると、左隣のメンバーに話しかける。 ・講話が始まるので会話をやめるようにスタッフに注意されると、「もうですか？」と発言する。 ・講話中は、持参したノートに絵を描いたり、背中を掻く、足を揺らす。

個人によって内容は異なるが、ワークショップに参加することによって参加者には変化が見られている。高校生グループは、言葉での自発的な発表は少ないが、話し合いでのメンバーの意見に対して、頷いたり肯定的な感想を発表する参加者が６名いた。ゲーム活動や茶話会では、参加者同士で共

通の趣味の話をして過ごすことが多かった。大学生・専門学生グループは、自分たちの困った経験を基にロールプレイを展開したり、話し合った意見を持参したノートに記入するなど、ロールプレイを自分の生活に活かそうとする様子が見られた。ゲーム活動や茶話会では、学校生活やアルバイト、進路の悩みを話し合っていた。

全体的に参加者同士の交流を楽しむ様子が多く見られたが、参加者の中には、他のメンバーになかなか声がかけられない方もおり、グループ内で関わるメンバーが固定してしまう場面があった。今後は、活動のグループ構成や席順などの工夫を行い、職員が介入しメンバーの関わりを拡げていくような配慮が必要であると考える。また、社会的なマナーや振る舞い方が分かっていない参加者が多く、参加者同士の関わりのみでは、自分達の言動に気づいていくことが難しい様子が見られた。

④　ワークショップ参加者へのインタビュー調査

インタビュー項目は、「1.また参加したい活動は何ですか？」「2.ロールプレイ活動に参加して、日常生活の中で参考にしたことはありますか？」「3.講話を聞いて、日常生活の中で参考にしたことはありますか？」「4.今後、どのような講話を希望しますか？」「5.ワークショップに参加して、他のメンバーとの交流はできましたか？」「6.今後、青年期ワークショップへの参加を希望しますか？」の6項目である。参加者全員に対し実施した。

インタビュー調査の結果から、ワークショップの活動に「また参加したい」（10名）と答えた参加者が多く、活動への満足度は概ね高かった。特に、ゲーム活動や茶話会を希望した参加者は複数いた。活動を通し「共通の趣味や学校の話題で交流ができた」（3名）という意見があり、メンバー同士の交流を求める意見が多かった。また、メンバーとの関わりの中で、困っているメンバーに自分から声をかけたり、積極的に他者と関わるようになるなどコミュニケーションスキルや対人面でも効果が見られた参加者がいた。「参加は難しい」と答えた参加者からは、「部活が忙しくなる」、「進学先が他市になる」などの意見があがった。

ロールプレイについては、話し合いを通して、「自分とは違う意見を知ることができた」、「自分にはそんな意見がないのですごいと思った」、「年が近くても色々な人がいることが分かった」という意見があり、他者視点の理解に繋がっていることが考えられる。また、「相手の顔を見て挨拶するよう心掛けるようになった」、「不快な思いを相手にさせないよう気をつけようと思った」と話し合った意見を日常生活で汎用させる参加者もおり、社会スキルの面でも効果が見られた。その一方で、「話し合い活動が続くことが負担である」と感じている方や、ロールプレイのテーマについて「日常生活にはない状況だった」、「既にできていることだった」という意見が複数あがった。

大学生・専門学生グループは、身近な問題として講話の満足度も高く、

「色々な仕事があることが分かった」と就労に対するイメージが高まったり、「卒業しても相談できるところがあると分かった」、「就活に落ち込んでいたが、前向きになれた」、「次回は先輩社会人の話が聞いてみたい」と将来への安心に繋がり、自立への意欲に結びついていた。

⑤　保護者アンケート

ワークショップから半年後に、アンケート送付可能な保護者13名に対し、アンケート調査を実施した。アンケート回収数は13、アンケート回収率は100%であった。

アンケートの結果について、表6、7、8、9と図3に示す。

表6　「本人が、青年期ワークショップに参加することを希望した理由は何ですか（重複回答可)」について

① 同じ趣味や悩みを持つ、同年代の仲間との活動の場所が欲しいから	6
② 家庭や学校以外での場所で、人との関わり方の練習をしたいから	8
③ 少人数での活動を通して、自分自身のことや相手の視点を知る練習をしたいから	5
④ コミュニケーションの練習をしたいから	6
⑤ 社会のマナーを覚えたり、振る舞い方の練習をしたいから	3
⑥ 大学や就職についての情報を知りたいから	7
⑦ 参加を勧めらたから	3
⑧ その他	0

表7　「本人が、ワークショップに参加して何か家庭や学校で変化したことがあれば、教えてください」について

・「就職する」、「働く」ということを、意識してきたように思う。
・怒りが抑えられるようになってきたなど、自分自身の成長に気付いた。
・時間がかかっても適応していくことができたり、代替え手段があることが分かった。
・アルバイトを始めた。
・少し自信がついた。（2）
・自分ができることを少しずつやるようになってきつつある。
・親子の会話が増えた。

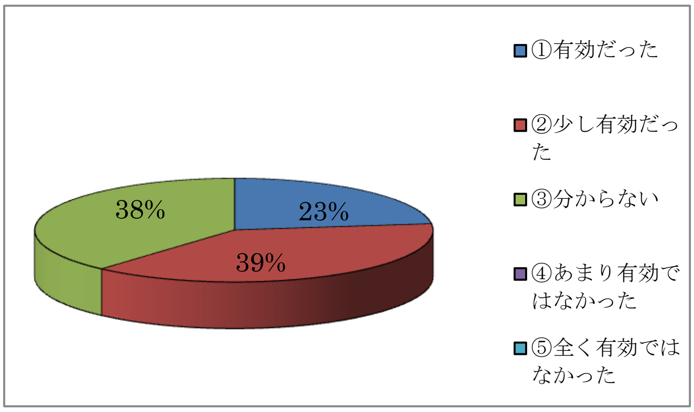


図 3　「本人が、ワークショップの活動に参加することは有効でしたか」について

表 8　「本人の現在の生活で、どんなことが心配ですか（重複回答可）」について

①学校での教師や友達との関わり方	6
②異性との付き合い方	2
③家族との関わり方	1
④生活面での対応（忘れ物が多い、電話対応が苦手など）	7
⑤学習面についての心配（授業についていけない、課題提出ができないなど）	3
⑥将来の進路についての不安（どんな就職先があるのか分からないなど）	10
⑦その他	4

表 9　「青年期ワークショップに関する要望などがあれば、教えてください」について

・平日に定期的にソースシャルスキルトレーニングの活動場として行って欲しい。
・将来進む道への手がかりやヒントを見つける場として継続して欲しい。（2）
・もう少し長い時間やって欲しい。
・回数を増やして欲しい。
・来年度も参加させて欲しい。
・活動を繰り返し行う中で、個人にも感想や悩みを聞いてもらう場を設けて欲しい。
・アルバイトをしている本人にとっては、活動内容が易しすぎた感じだった。
・発達障害者を受け入れている企業などの情報が欲しい。
・職業体験をさせて欲しい。
・先輩の話が聞けると本人も励まされると思う。

図 3 の「本人がワークショップの活動に参加することは有効でしたか」の主な内容を以下に示す。

・働くことに少し興味を持った。

・ワークショップを楽しめた。
・帰宅後、メンバーのことを家で良く話した。
・自分が人からどう見られているのか確認して少しほっとした様子。変わったところはあるけれど、悪い人には思われていないということが分かった様子。
・メンバーの様子を見て、「自分もこんな感じなのかな？」と思ったらしい。
・少し積極的になった。
・同じような立場の同年代の仲間と出会えた良い機会だったと思う。
・1回しか参加できなかったので、実際のところ有効かどうかは分からないが、このような活動の場があると知ることができた。
・変化はあまり感じなかったが､ワークショップでのことを話してくれた。
・特に変化は感じられないが、ワークショップ当日は気の合う参加者と話しもでき充実していた様子。
・大きな変化はないが､話しを聞いたり人と関わる場所へ参加したことが、有意義だった。
・何らかの人との関わりの中で何かを感じ何かをしようという気持ちになってくれたらと思ったが、本人の成長を待つしかないのかなと思う。
・ワークショップのことは話してくれたが、本人に合う同年代のメンバーの参加があったのかは分からない。

表 8 の「本人の現在の生活で、どんなことが心配ですか（重複回答可)」の主な内容を以下に示す。

＜①学校での教師や友達との関わり方＞
・人の気持ちが分からず自分と価値観が合わない友達を受け入れられない。
＜④生活面での対応（忘れ物が多い、電話対応が苦手など）＞
・住所や郵便番号を覚えない。
・家事や仕事の段取りが難しい。
・決められた家での約束（ゲームの時間、試験勉強の予定）が守れない。
・事前の準備とお金の使い方に心配がある。
＜⑥将来の進路について不安（どんな就職先があるのか分らないなど）＞
・学校卒業後の進路が決まるのか不安。(2)
・自立できるのか不安。(8)
・本人に合う仕事が何か分からない。(2)
＜⑦その他＞
・現在の就職内定先の業務内容に不安がある。

表 6 の結果から、「同じ趣味や悩みを持つ、同年代の仲間との活動の場所が欲しいら」、「家庭や学校以外での場所で、人との関わり方の練習をした

いから」、「コミュニケーションの練習をしたいから」という回答が多く、保護者にとってワークショップは、「仲間作り」や「少人数集団でのソーシャルスキルトレーニングの場」としてのニーズが高いことが分かった。また、「進学や就職についての情報を知りたいから」と回答した保護者も多く、将来への手がかりになるような活動を望んでいることが分かった。

表 7 の結果から、ワークショップに参加以降、家庭や学校でも少しずつ自信を取り戻し、アルバイトや若者サポートステーションに録するなど新たな一歩を踏み出した参加者がいることが分かった。また、家族とのコミュニケーションが増えたり、自己理解やセルフコントロールの面で効果が見られてる参加者がいた。

図 3 の結果から、23%がワークショップへの参加は「有効だった」、39%が「少し有効だった」と回答しており、62%の保護者がワークショップへの参加が本人にとって何らかの有効性があったと感じていることが分かった。その一方で、「分からない」が 38%であった。活動回数が 4 回と限られていたことや、個人によって参加回数も異なったため、実感できる変化に結びつかなかったことが考えられる。変化自体はないが、活動時の様子を家族に話す参加者が数名おり、保護者も「充実していたようだ」と感じているため、今後も活動を継続しながら参加者の変化を追っていく必要がある。

表 8 の結果から、「将来の進路について不安」という回答が最も多く、保護者は自立についての心配が強いことが分かる。また、「学校での教師や友達との関わり方」や「生活面での対応」の回答も多く、対人対応、スケジュールのプランニングや金銭管理などに関する具体的な困り感があげられた。

表 9 のワークショップへの要望に関しては、色々な意見があがっているが、次年度以降も活動の継続を希望する意見が多かった。

２．考察

青年期ワークショップは、今年度より夏季休暇中に全 4 回のシリーズでプログラムを実施したが、9 名の参加者が「参考になった」、「少し参考になった」と答えており、ワークショップに「また参加したい」と答えた参加者は 10 名いた。また、「次回は、スポーツがしたい」、「冬休みや春休みもして欲しい」などの活動要望も出ており、参加者の評価結果からも、ワークショップが、参加者にとって「同年代の仲間と過ごす楽しい場所」、「安心してコミュニケーションの練習ができる場所」になることができたと考える。

また、ワークショップに参加することによって、アルバイトを始めたり、若者サポートステーションに登録するなど、新しい一歩を踏み出したメンバーが 3 名いた。活動への参加を通して自信をつけている参加者からは、「自分は何もできない訳ではなかった」、「悩んでいるのは一人ではないと分かっただけで、心強い」などの意見があがっており、自尊感情尺度評価点の伸びに結びついていた。ワークショップが、参加者の精神的な安定にも繋がったと考える。

その一方で、ロールプレイ活動の設定方法や時間配分には課題があがった。ロールプレイのテーマは、ソーシャルスキルチェックリストの中の課題の多かった項目から選出して設定したが、「日常生活にはない状況だった」、「既にできていることだった」という意見も多かった。また、話し合い活動が続くことによって、活動への参加が負担になった参加者もいた。今後は、参加者が打ち解けやすいゲーム活動から導入する、ロールプレイのテーマの内容を参加者に考えてもらうなどの活動の組み立て方の検討が必要である。進行の際には、話し合いの内容を絵にして提示したり、ソーシャルストーリーで説明するなど、参加者の状態を見ながら、視覚支援を使用した工夫が必要であると考える。

また、全体的には、社会的なマナーを理解していなかったり、振る舞い方に課題がある参加者も多い。自己モニタリングが難しい参加者には、自分の言動を振り返ることができるようなプログラムの内容の検討および個別面談を通し、個人目標の確認と活動の振り返りを丁寧に行うことによって、必要なスキルを意識し、家庭や学校でも使えるようにすることが今後の課題である。

保護者アンケートの結果からは、保護者にとって自立についての悩みは大きく、進路を選択していく情報を得るための場としてもワークショップのへの期待は高かった。今後も関係機関と連携しながら、進路の講話や就労している社会人当事者との座談会などを企画し、参加者が将来へのイメージを繋げるような支援が重要である。参加者が楽しんで継続的に参加できるよう配慮しながら、各世代に応じた活動内容を考慮して活動を実施していきたい。

ソーシャルスキル評価表

氏名 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

資料　3ー2

【評価点基準】

できる	81 ～ 100%
だいたいできる	51 ～ 80%
あまりできない	21 ～ 50%
ほとんできない	0 ～ 20%

集団行動

			1回目					2回目				
			できる	だいたいできる	あまりできない	ほとんどできない	備考	できる	だいたいできる	あまりできない	ほとんどできない	備考
			3	2	1	0		3	2	1	0	
対人マナー	1	状況に合わせた適切な言葉づかいをする										
	2	自分が悪いときに自ら進んで謝罪する										
	3	相手の話に関心を示しながら聞く										
	4	適度な距離で人と接する（くっつきすぎない）										
	5	時間を守る										
状況理解・こころの理論	1	相手のしぐさや表情から気持ちを読みとる										
	2	冗談や皮肉など裏の意味のある言葉を理解する										
	3	身だしなみに適度に気を配る										
	4	人の目を適度に気にして振舞う										
	5	場の雰囲気を感じる										
セルフコントロール	1	授業や課題に集中して取り組む										
	2	行動する前にじっくり考える										
	3	自分のした行動を振り返る										
	4	感情的になっても気持ちを上手く切り替える										
課題遂行	1	与えられた仕事を最後までやり遂げる										
	2	失敗や予定外のことが起こっても柔軟に対応する										
	3	仕事や課題に取り組む際、計画を立てそれに沿って実行する										
	4	共同の作業で、与えられた役割をきっちりとこなす										
	5	仲間と協力しながら仕事（課題）をこなす										

仲間関係スキル

			1回目					2回目				
			できる	だいたいできる	あまりできない	ほとんどできない	備考	できる	だいたいできる	あまりできない	ほとんどできない	備考
			3	2	1	0		3	2	1	0	
仲間関係の開始	1	適度に視線を合わせて人と話すことができる										
	2	臆することなく仲間に話しかける										
	3	仲間を遊びに誘う										
仲間関係の維持	1	仲間と冗談を言い合う										
	2	仲間と会話を続ける										
	3	友だちとの約束を守る										
	4	外出や遊びなど、仲間と計画を立てて実行する										
	5	仲間と趣味や興味のあることを共有する										
	6	仲間と秘密を共有する										
仲間への援助	1	仲間が失敗したときなど励ましたりなぐさめたりする										
	2	困っている仲間を助ける										
	3	仲間の悩みや不満を共感しながら聞く										

コミュニケーションスキル

			1回目					2回目				
			できる	だいたいできる	あまりできない	ほとんどできない	備考	できる	だいたいできる	あまりできない	ほとんどできない	備考
			3	2	1	0		3	2	1	0	
聞く・話す	1	相手の話を遮ることなく聞く										
	2	適切に発表やスピーチをする										
非言語的スキル	1	適切な声の大きさで話をする										
	2	タイミングよく、うなずき・あいづちを入れる										
	3	身振りや手ぶりを上手く使って表現する										
アサーション	1	知っている人に自分から挨拶をする										
	2	集団に向かって自分の考えを述べる										
	3	人に感謝の意を伝える										
	4	嫌なことはしっかりと断わる										
	5	悔しさや怒りを言葉で伝える										
	6	分からないことは質問する										
	7	親しい人に不安や心配なことを話す										
	8	困ったとき、人に助けを求める										
話し合い	1	話し合いの内容に沿った発言をする										
	2	決まった意見に同意する										
	3	話し合いの際、多数決、妥協案などの方法を提案する										

資料 3－3

氏名

自尊感情尺度

	1 強くそう思わない	2 そう思わない	3 そう思う	4 強くそう思う
1、私は、自分自身にだいたい満足している。				
2、時々、自分はまったくダメだと思うことがある。				
3、私にはけっこう長所があると感じている。				
4、私は、他の大半の人と同じくらいにものごとがこなせる。				
5、私には誇れるものが大してないと感じる。				
6、時々、自分は役に立たないと強く感じることがある。				
7、自分は少なくとも他の人と同じくらい価値のある人間だと感じている。				
8、自分のことをもう少し尊敬できたらいいと思う。				
9、よく、私は落ちこぼれだと思ってしまう。				
10、私は、自分のことを前向きに考えている。				

4段階評定尺度
1＝強くそう思わない
2＝そう思わない
3＝そう思う
4＝強くそう思う

＊逆転項目の番号＝2、5、6、8、9

【結果の処理】
・各質問項目に対して選択された評定段階の数値を合算する。
・設問番号2、5、6、8、9　は逆転項目となる。
（1＝「強くそう思わない」を選択したときは4点、2＝「そう思わない」の場合は3点、3＝「そう思う」は2点、4＝「強くそう思う」であれば1点と変換する）
・平均年齢20.84±1.56歳の健康的な大学生を対象に実施した結果の平均値は、21点～30点。

青年期ワークショップ　インタビュー（高校生）

資料　３－４

平成 26 年　月　日

氏名＿＿＿＿＿＿＿＿　担当（　　　）

青年期ワークショップの活動全体を振り返り、答えてください。

〇また参加したい活動はどれですか？（複数回答可）

・ロールプレイ　・ゲーム　・茶話会　・「働くことについて」講話　・調理

※その理由を教えてください。

（　例　ロールプレイで社会スキルの練習をしたい。茶話会で自分の話をしたい。　）

〇ロールプレイ活動に参加して、日常生活のなかで参考にしたことはありますか？

高校生　第１回　・仲間を遊びに誘うときの方法（教室のなかでの会話）
　　　　第２回　・知っている人に挨拶をするときのマナー（廊下ですれ違うとき）
　　　　　　　　・計画の立て方（夏休みの計画）
　　　　第４回　・調理のマナー

ある　　　ない

・「ある」場合は、具体的にどんなことを参考にしたのか教えてください。

（　例　学校で挨拶するようになった。調理前に手洗いするようになった。　）

・「ない」場合は、具体的にどんなところが参考にならなかったのか教えてください。

（　例　実際の状況に結び付かない内容だったので、実践できなかった。　）

〇「働くことについて」の講話を聞いて、日常生活のなかで参考にしたことはありますか？

ある　　　　ない

・「ある」場合は、具体的にどんなことを参考にしたのか教えてください。

（　例　自分で仕事のことを調べるようになった。職業の適性を知りたいと思った。　）

・「ない」場合は、具体的にどんなところが参考にならなかったのか教えてください。

（　例　まだ職業のことにイメージがわかないので参考にならなかった。　）

〇今後どのような講話を希望しますか？

（　例　先輩大学生から、大学生活についての話。社会人当事者の話が聞きたい。　）

〇ワークショップに参加して、他のメンバーとの交流はできましたか？

できた　　　　できなかった

・「できた」場合は、具体的にどんな交流をしたのか、またメンバーと交流して感じたことを教えてください。

（　例　共通の趣味について語りあえた。自分と似たタイプの人がいて、安心した。　）

・「できなかった」場合は、具体的にどんなところが難しかったのか教えてください。

（　例　自分から話しかけることが難しかった。話の輪の中に入れなかった。　）

〇今後、青年期ワークショップへの参加を希望しますか？

はい　　　　　いいえ

〇ワークショップで、希望することはありますか。意見・要望があれば、具体的に教えてください。

（　例　ロールプレイより、ゲームの時間を増やして欲しい。ロールプレイは、場面設定から自分たちで決めたい。メンバー全員できるゲームをしたい。もっとワークショップを定期的にして欲しい　）

＊　その他聞き取りができたことを記録してください。

青年期ワークショップ　インタビュー（大学生・専門学校生）

資料　3－5

平成 26 年　　月　　日

氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　担当（　　　　）

青年期ワークショップの活動全体を振り返り、答えてください。

〇また参加したい活動はどれですか？（複数回答可）

・ロールプレイ　　・ゲーム　　・茶話会　　・「働くことについて」講話　　・調理

※その理由を教えてください。

（　例　ロールプレイで社会スキルの練習をしたい。茶話会で自分の話をしたい。　）

〇ロールプレイ活動に参加して、日常生活のなかで参考にしたことはありますか？

高校生　第 1 回　・分からないことを質問するときの方法（先生への質問）

・気持ちの切り替え方について

第 2 回　・予定外のことが起こったときの対応方法（先生からの授業の変更）

・気持ちの伝え方について（友だちとの会話）

第 4 回　・調理のマナー

ある　　　　ない

・「ある」場合は、具体的にどんなことを参考にしたのか教えてください。

（　例　質問するときに、相手への声のかけ方を気にするようになった。　）

・「ない」場合は、具体的にどんなところが参考にならなかったのか教えてください。

（　例　実際の状況に結び付かない内容だったので、実践できなかった。　）

〇「働くことについて」の講話を聞いて、日常生活のなかで参考にしたことはありますか？

ある　　　　ない

・「ある」場合は、具体的にどんなことを参考にしたのか教えてください。

（　例　自分で仕事のことを調べるようになった。職業の適性を知りたいと思った。　）

（　　　　）

・「ない」場合は、具体的にどんなところが参考にならなかったのか教えてください。

（　例　まだ職業のことにイメージがわかないので参考にならなかった。　）

（　　　　）

〇今後どのような講話を希望しますか？

（　例　先輩大学生から、大学生活についての話。社会人当事者の話が聞きたい。　）

（　　　　）

〇ワークショップに参加して、他のメンバーとの交流はできましたか？

できた　　　　できなかった

・「できた」場合は、具体的にどんな交流をしたのか、またメンバーと交流して感じたことを教えてください。

（　例　共通の趣味について語りあえた。自分と似たタイプの人がいて、安心した。　）

（　　　　）

・「できなかった」場合は、具体的にどんなところが難しかったのか教えてください。

（　例　自分から話しかけることが難しかった。話の輪の中に入れなかった。　）

（　　　　）

〇今後、青年期ワークショップへの参加を希望しますか？

はい　　　　　いいえ

〇ワークショップで、希望することはありますか。意見・要望があれば、教えてください。
（　例　ロールプレイより、ゲームの時間を増やして欲しい。ロールプレイは、場面設定から自分たちで決めたい。メンバー全員できるゲームをしたい。もっとワークショップを定期的にして欲しい　）

＊　その他聞き取りができたことを記録してください。

氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿様

資料　3－6

平成26年度「青年期ワークショップ」保護者アンケート

＊　該当する番号に〇をつけ、必要なものに記入してください。

1　お子様が、青年期ワークショップに参加することを希望した理由は何ですか。（複数回答可）

①　同じ趣味や悩みを持つ、同年代の仲間との活動の場所が欲しいから。
②　家庭や学校以外の場所で、人との関わり方を練習したいから。
③　少人数での活動を通して、自分自身のことや相手の視点を知る練習をしたいから。
④　コミュニケーションの練習をしたいから。
⑤　社会のマナーを覚えたり、振る舞い方の練習をしたりしたいから。
⑥　進学や就職についての情報を知りたいから。
⑦　参加を勧められたから。
⑧　その他
（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

2　お子様が、青年期ワークショップに参加して家庭や学校で何か変化したことがあれば、教えてください。

例　学校でも以前より積極的に友達に話しかけるようになった。
　　アルバイトを始めた。

（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

3　お子様が、青年期ワークショップの活動に参加することは有効でしたか。

①　有効だった　②　少し有効だった　③　分からない　④　あまり有効ではなかった
⑤　全く有効ではなかった

＊　上記〇をつけた内容で、具体的な理由があれば、教えてください。

例　本人なりに相手のことを考えて行動するようになった。
　　日常生活での変化はあまり感じられなかった。

（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

4　お子様の現在の生活で、どんなことが心配ですか。（複数回答可）

①　学校での教師や友達との関わり方

②　異性との付き合い方

③　家族との関わり方

④　生活面での対応（忘れ物が多い、電話対応が苦手等）

⑤　学習面についての心配（授業についていけない、課題提出ができない等）

⑥　将来の進路についての不安（どんな就職先があるのか分からない等）

⑦　その他

（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

＊　上記〇をつけた内容で、具体的な理由があれば、教えてください。

例　学校では気の合う友達がおらず、一人で過ごすことが多いようである。
本人に合う就職先をどのように見つけたらよいのか分からない。

（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

5　青年期ワークショップに関する要望等がございましたら、ご自由にお書きください。

（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

ご協力ありがとうございました。

平成 26 年度　発達障害児者支援モデル事業
企画・推進委員会の実施状況

第１回

日時：６月 24 日（火）　18 時 30 分～20 時 00 分

検討内容：

平成２６年度モデル事業　事業計画について

①成人期以降における生活支援プログラム開発

②行動障害の予防における効果的な支援手法の開発

③高校生・大学生を対象としたワークショップ

第２回

日時：12 月 16 日（火）　18 時 30 分～20 時 00 分

検討内容：

平成２６年度モデル事業　事業経過について

①成人期以降における生活支援プログラム開発

②行動障害の予防における効果的な支援手法の開発

③高校生・大学生を対象としたワークショップ

成果物の公表計画

①成人期以降における生活支援プログラム開発

・発達障害者支援センターが主催する研修会や関係団体等の研修会で、実践報告により情報発信し、普及・啓発を図る。

②行動障害の予防における効果的な支援手法の開発

・発達障害者支援センターが主催する研修会や関係団体等の研修会で、実践報告を行う。

・発達障害者支援センターのホームページにより情報発信する。

③高校生・大学生を対象としたワークショップ

・発達障害者支援センターが主催する研修会や関係団体等の研修会で、実践報告により情報発信し、普及・啓発を図る。また、若者サポートステーションや教育委員会との協働事業を検討する。

・発達障害者支援センターのホームページにより情報発信する。